



一時間

一時間は走る悩みの種を、
十二分に藪フクロウは保有していた。
なまじ人智の毒にやられて、
己など意識したのが悪かったのだろう。

藪フクロウは今日日になにをしてもいいか分からないまま、
地面を転がって、回る頭を両手で抱えた、
フクロウ頭とは不便なものである、
人の頭であれば悩みの種があれば首を振ったりするものだろう、
ただフクロウ頭のする悩みのシェイクは、
まま、得物を狙う鳥の態度に化ける。

人は逃げるであろう、
最初の一時間で起きたことはそれであった。
藪フクロウを茂みで目撃した散策の徒は、
キノコのように大切に扱ってはくれない。
悩みが真相に変わるほどの悲鳴をひとつ貰ったではないか。
これが藪フクロウの脚を前へ動かした最初の衝動であった。

